

# 人材育成学会第10回年次大会基調講演 講演録

2012年12月9日に、立教大学池袋キャンパスにて、人材育成学会第10回年次大会が開催されました。「女性のキャリアを考える：企業と学校教育との連携」を大会テーマとして、精神科医でもいらっしゃる立教大学現代心理学部教授の香山リカ先生をお招きし、シンポジウムを実施しました。香山先生の基調講演の講演録をお届けします。

## 基調講演：「女性のキャリアを考える」

講演者：立教大学現代心理学部

教授・精神科医 香山 リカ

ご紹介いただきました香山と申します。

私は、立教大学の教員で、普段はこの池袋キャンパスではなくて、埼玉の新座キャンパスにありますが、週に一回はこちらでも授業がありますので、今日、授業をやる教室、キャンパスで、こういうお話をさせていただくのは、少し勝手が違って緊張していますが、よろしく願います。

いろいろなご専門領域の方がお集まりとお聞きましたので、私もあまり学術的な話ではなく、雑談風に、今、私が、女子、女性のキャリアということで感じていることなどを思いつくままに話をさせていただいて、皆さんとも少しやり取りが出来ればなと思っています。

さて、今、紹介がありましたように、私は、元々、精神科医という仕事を二十六年ぐらいしております。学生にそういう風に言いますと、「私が生まれるずっと前から、先生は、精神科医だったのですね。」と言われ、ちょっとショックを受けたりもしますが、非常に長いことお仕事をやっています。

個人的な話をしますと、一浪して医学部に行ったものですから、年齢的には、新卒の学生さんたちの年齢よりちょっと上で、社会にでたわけです。それが丁度、男女雇用機会均等法が施行された年の1986年に医者になりました。その時は、私も二十五、六歳ぐらいだったのですが、丁度そうい

う状況で社会に出て、そのころから思うと、隔世の感がありますが、私が医学生のところは、まだまだ「女子、女性お断り」という医局がありました。私の同級生も、外科医を志望した女子学生だったので、教授のところ「私も外科医になりたいのですが。」と相談に行ったら、本当に言語道断というか「うちは、女はお断りだから。」と言われて、外科医の道を諦めたのです。そういうことが、平気で行われていました。

しかし、今や立教も五十パーセント以上が女子ということですし、医学部でも女子の割合が、三割、四割、横浜市立大学は、今年五割ぐらいだったと思いますが、半分は女性ということになっています。特に医師の場合は、せっかく、六年間も大学に行き、その後、研修を二年間やって、やっと第一歩を踏み出したのに、途中でキャリアが中断してしまうというのは、本人にとっても、日本の医師不足の現状にとっても、非常に痛手が大きいので、女性医師の支援というのは、やはり医療の世界でも大きな問題になっています。

女性も社会で活躍の場が与えられ、自由に仕事を選択できるようになっているはずなのに、精神科の診察室にいますと、つくづく、女性の生き方は大変だな、女性が生きていくというのは、これはもう、全く、自由に生きやすくなっているとは言いがたいなということを、最近、益々感じさ

せる、様々な立場の女性の方たちが、診察室にやってきました。

最初に、実際に私が経験したケースなのですが、この話を人にすると、「それ作り話でしょ。」と言われるのですが、これは、ただの前振りと言うかジョークみたいなものなのですけど、お話をさせていただきます。

ある時、病院の外来当番で診察室に入り、看護師さんが用意してくれた患者さんの予約表を見ましたら、朝から、三人立て続けに、新患の方のお名前が予約表にあって、その方々が、皆、同じ四十二歳の女性だったのです。それを見た時に、同級生が連れ立って来たのかなと思って、「これって知り合いの方たちが予約したのですかね」と尋ねたら、看護師さんが「いや、違うみたいですよ。それぞれ別の日に予約の電話が入って、たまたまこの日時が空いていたので、続けて予約を入れたのです。」と看護師さんが言うのです。「ああ、そんな偶然なこともあるものだね。」と言って、三人の方を立て続けに診ることになったのです。そしたら、本当にイソップ童話というか御伽草子みたいというか、変な話なのですけど……。

最初の方は、シングルで四十二歳で、ずっと仕事をされてきたという方だったのです。それで、「どうしましたか。」と尋ねたら、「これまでずっと仕事してきたが、最近疲れが取れなくて、気持ちも落ち込んで、なんかとっても元気が出ない。」と、いわゆる鬱症状を訴えるのです。いろいろ、話を聞いておりましたら、

「四十二歳、ずっと仕事を続けてきた…、これまで真面目に仕事やってきて、気づいたらこんな年になって、結婚もしていないし、子供もいない。なんとなく、これで、よかったのだろうか、自分の人生が、間違っていたのかなと思えてくる。これまで働いてきて、つい最近、小さなマンションを買うことにして、ローンを組んで大金を払った、まあ、いわゆる自分の城っていうのが出来ただけけれど、それがとても狭い。このまま大学卒業して、二十年ぐらい必死に働いてきて、そこで手に入ったものは、この狭いマンションたった一

つ。しかも、ローンでまだ仕事しなければいけない。こんなものために、これまで働いてきたのかと思ったら、自分の人生が本当につまらない、くだらない人生だった気がしてきた。これから結婚したり、子供をもったり、というのは、ちょっと現実的じゃないかもしれない。まあ、結婚ぐらいは出来るかもしれないけど、出産までとなると、それは考えられない。それで、高校、大学の同窓会に行くと、大体、同級生は結婚して、高校生とか、もっと大きなお子さんがいる人もいます。そして、うちの子は、今度大学に入ったとかという話を聞いていると、とても羨ましい。でも、若い時は早く結婚して、専業主婦になった友達を見ていて、『ああ、かわいそうに。この人たちは、自由がなくて気の毒だ。私は自分で稼いだお金を自分で好きなように使えて、仕事も出来て、とても充実しているな。』と思っていたけれども、すっかり逆転してしまった。今では自分がとっても惨めで仕方がない。こんな私の人生間違っていたのではないかという気持ちで、本当に情けない。」

まあ、鬱状態だからそう思っているのかも知れないのですが、そういう方だったのです。もちろん私も、その方に、今まで、頑張り過ぎてきて、エネルギーが磨り減って鬱状態になっていて、余計、悲観的に考えているのだから、まずは、ちょっと鬱状態を少し回復させるために、たとえばお薬を使うとかね、こういう方法もありますよ、というお話をして、「でも、あなたの生き方は、惨めとか、決して間違っていた事はないと思いますよ。一生懸命都会で、一人でお仕事されて、自分で生計を立てる事は、すばらしい事じゃないですか。」と励まして、「じゃ、また来週」と言ってその日は終わったのです。

次に二番目の方、また四十二歳の方ですが、その方は、今度は、専業主婦の方でした。雑談っぽい話なので、聞き流していただいてもいいのですが、その方は、お子さんが二人いて、上のお子様は大学生で、下のお子様は高校生とおっしゃっていました。その方が言うには、

「子供が大きくなって、大分手が離れてきた。夫は四十代で、今、仕事がとっても忙しい。夫も子

供たちも、それぞれ自分の世界があって、会社や学校で、生き生きと過ごしているのに、私だけが家庭の中で置いてきぼりになってしまっているような気がする。社会に全然参加してない、こんなのでいいのだろうかと思ったら、とてもさびしい気持ちになってきた。それで、これから仕事してみようかなと思うのだけれども、これまで、なんの資格も取ってこなかったし、社会人としての経験もあまりないので、自分が出来る仕事は、限られているし、勇気もない。そうすると、人生まだ半分ぐらいあるのに、これからこの先の生活を、あと三十年も四十年も、こんな惨めな気持ちのまま過ごさなければならぬのか。」そして、またその方が、「高校の同窓会に行く」とおっしゃるものですから、(あなたも同窓会ですか。)

「友達でずっと仕事している人がいるのですけど」(え、さっきの方と同じ学校ですか。)と言いたかったのですが、違うのですね。

「そういう人は、四十代だと会社でもかなり中堅どころみたいで、出張で海外行ってきたとか、部下ができたとかいろんな話をしている。政治とか経済の話なんかもね、デフレはどうだとか言っていて、私は全然分からない。そういう人たちを見ていると、『かっこいいな、女性も今はああやって、本当にキャリアを築いていくことができるのだな。私は、もう学校卒業してすぐ結婚っていう道を選んで、そのときは幸せだなんて思ったけど、本当は、仕事を選ぶ人生のチャンスがあったのに、それを生かさなかった私が悪いのだけれども、これで良かったのだろうか。』とつくづく思うのです。」

そういう方だったのですね。もちろん、その方にも、さっきの方に話したのと同じような話をし、「じゃあ来週」。これ、本当に作り話じゃないのです。

三番目の方は、仕事も家庭もっている方でした。仕事をしてきた…、三十代後半になって結婚して、お子さんが生まれた…、お子さんは、まだ学校に行っていないで、保育園に行っている…そういう方でした。この方は、何がどうしたのかというと、その方は、「私はすべてが中途半端な

気がする」と言うのです…今度は…。

「仕事も頑張ってきたのだけど、途中で、妊娠、出産という事になって、今、まだ保育園なので、定時で会社を出ているのですが、私の会社は、とても忙しく、夜になってから会議があるとかいうこともある。でも、私の場合は、保育園のお迎えがあるので、必ず定時で、退社している。その時、本当に周りの人に、『ごめんなさいね、今日も夜のミーティング出られないけどお願いします。』と言って、本当にぺこぺこ謝りながら会社を出てくる。ダッシュして保育園に行くのだけど、それでも、いつも保育園のお迎えは最後、あるいは時間を過ぎていた事もある。そうすると、今度は、保育士の方に、『ごめんなさい、ごめんなさい、今日も遅くなっちゃってすみません。』と、いつも謝らなければならない。そうすると子供までが、『お母さん遅いよ。』と言うので、子供にまで、『ごめんね、今日も遅くなっちゃったわね。早く帰りましょう。』と子供にも謝る。そして帰りがけに、子供の手を引いて、スーパーに寄って、夕食の支度のものを買って、もう疲れきっているし、大体は、出来合いのお惣菜やお弁当をあわせて買って、うちに帰る。そして、子供のいろいろなことをやっているうちに、あつという間にもう八時、九時になってしまう。そうするとその頃、夫が帰ってくる。そして、夫に対して今度は、買って来たお惣菜、お弁当を電子レンジで温めて出して、夫に対しても、『ごめんなさい。今日もお弁当なの。こんな出来合いのものでごめんなさい。』と謝り、『今日もコロッケか。』と言われながら、お弁当とかそういったおかずを出す…もうなんか、私の人生みんなに謝っている。会社でも保育園でも家庭でもね。みんなに、『ごめんなさい、ごめんなさい。』って、ぺこぺこし続けている。本当にこれで良かったのだろうか、友達、学校時代の友達は、仕事を選んだ人、家庭を選んだ人、いろいろいるけれど、それぞれの道で一生懸命、そこに打ち込んでやっている人たちもいる。ああ、そういう人たちは潔いな、私みたいに、どれもこれも、なんてやってしまった結果、もちろん子供も可愛いし、仕事も楽しいけれども、全てが中途半端なような気がして、自分の人生これで良かったの

うかと思ってしまう。」というのです。

私は、その方たちのそれぞれのお話を聞いたので、本来だったら、その三人の方々に集まっていただけで、一部屋で、「それぞれ、ちょっと話してみてください。皆さんそれぞれ、こういう人生がよかった…、他の人のことを羨ましがって、自分は惨めだなんて言って、それぞれの人たちが、自分の生き方以外が良かったと思っている…、私は間違っている…と」思っているようですが、どうですか。」と話をしてほしいなと思ったぐらいでした。もちろん、そんな事はできないので、それぞれの人たちに、「いや、あなたは一生懸命やっていますよ。」と励ますしかなかったのですが…。それを見ていて、本当につくづく私も考え込んでしまいました。

そこに生き方の正解というものがあるわけじゃないのですが、結局どの生き方をとったとしても、もちろん診察室にいらっしゃる一部の方かもしれませんが、何か自分以外の生き方に、答えがあったのではないかと…。私の生き方は、何かこれは選択の誤りだったと思わなければならない…。あるいは、自分の生き方は、これでよかったかなとは思ってはいるのだけでも、何か、その自分の生き方に自負心、プライドを感じる事が出来ない…。これしかなかったかと思いつつも、他の人の生き方のほうが、堂々として立派なような気がする…。という、非常に自己肯定感を得られにくい、あるいは自己否定してしまう状況が蔓延しているのです。こんな生き方でみんなに申し訳ない、あるいは、これは間違っていたのではないかという風に、自分に対して、非常に惨めだとか情けないとか、後悔を感じなければいけない…。これは、ごく一部の例かもしれませんが、この人たちを見ていて、私自身も女性に対しては、こう生きるという風に、なかなかモデルを示しにくい…。そうやって生きてきた人たちが、今度は「私の人生はちょっと間違っていたのではないかと、私以外の生き方をしなさいよ。」と下の世代に伝えなければいけなかった…。とか。そういう風に「私を見よ」と、なかなか女性が言いにくい…。答えが見つけづらいのです。

これは私の世代、つまり、まだ女性の生き方が、まだ制限されていた時とは違う、今の女性が置かれている状況なのかなという風に思います。私も、「これは、なぜ、何が、おきているのか。」といういろいろ考えます。皆さんたち、それぞれいろんなお立場から考えるとと思いますが、私は精神科医という立場なので、いろいろ思い起こす事もあります。

たとえば、私がいる精神医学の分野でも、皆さんもご存知の通り、人間の深層心理とか、あるいは幼児期の体験とかにさかのぼって人間の事を考える精神分析という分野がありますね。この精神分析を作った人は、皆さんもご存知のフロイトという人ですけど、このフロイトの理論というのは、いろいろな意味で、その後、批判が多かったのです。

一番、批判の原因になったのはフロイトの考えというものが、非常に男性中心、男性というよりも、ある意味、男性器ですね。そういったものを中心に、つまり、それがあつかないかというのが、即物的な男性器というよりも、象徴的なというか、心理的なものを含めて、「俺は男なのだ。」という、そういうよりどころとでもいいでしょうか、ある意味、物質的なということではなくて、心の中にある男を中心とした考えなのです。フロイトやその後継者といわれたラカンというフランスの精神分析家は、つまり、「女性というのは、男ではないもの」という考えで、理論を組み立てた。そしてフロイトなども、男性の心理というものを考えるときに、非常に大きな柱として、去勢不安という、「男性でなくなったら、男性器がなくなっちゃったらどうしよう。」という心理が、男性の人生において、色々なところに顔を出して、その男性の一生を支配する…。つまり、「女性になっちゃったらどうしよう」という…。女性というのは、かくも男性にとっては、惨めでそうならおそろしい…。そういう欠けたものであるという認識で、この理論、精神分析というものが出来上がっているというのが、後世に、特に女性たちから、非常に批判されたわけです。

男性というのは、最初から、男であるということに自分の存在意義を感じている…。それがそうじゃなくなったらどうしよう…。という不安

をずっと持っているという言い方に対して、それは、どうも女性というものを、男よりも下のもの、あるいは男から何かを引き算したものが女だという考えが中心にあるという事で批判されています。しかし、もちろん、このフロイトの考えを男性中心主義という風に考え、別にフロイト本人には、多分、女性を蔑視するとか、女性を劣等なものともみなすという感覚はなかったのだと思います。ただ、理論的には、そう見られてもしょうがないようにはなっている。しかし、社会の中では、まだまだ実は、そのフロイトやラカンが主張していたようなその当時の、「女とは、男でないもの」とか、「男から何かを引いたもの…最初から欠けた存在としての女性」という意識が、いくらフロイトの理論が否定されていても、実はずっと続いてしまった、続いているのではないかと…、あるいは、もしかしたらフロイトなどは、連綿としてあるそういった時代の社会の中の無意識みいたところを、理論的にうまく切り取って、自分の理論を作っていたのかもしれないですね。

どういう事かといいますと、私が先ほど上げた、四十二歳の三人組の女性の例を見ても、皆さん、とにかく何かにならなければいけないと思っている。最初の女性だったら、とにかく仕事をしなければいけない…、でも私には何かが足りない。その証が小さなマンションひとつなのかという事に失望している。二番目の女性は、母にならなければいけない…、必死意子育てをしてきた…、ちゃんと母にはなった…でも何かが足りない…、社会に参加していないのではないかと…、夫に比べて私は欠けた存在じゃないかと…、子供に比べて、私は何か社会性というものがないのではないかと…という事で悔やんでいる。

三番目の女性は、仕事もしているし、母にもなった、妻にもなった…、しかし、それぞれが、まだ成り足りないのではないかと…、仕事人間としても半端じゃないかと…、母としてもこれじゃ失格じゃないかと…、何かになろうとしなければいけない…、でも、いくらやっても成りきれない。そこで非常に苦しんでいる訳ですね。

でも、客観的に見れば、その三人とも非常に頑張っている、十分によくやっている。もっと自分に対して自信を持っていいのではないですか。

最初の方も、よくやっていますよね。「この都会で、一人で生きてマンション買うなんて、たいしたものだ。」と思ってももちろんいいですしね。二番目の方も、「この大変な中で、お子さんを二人、一生懸命育ててきて、私も頑張っているわ。」という風に周りからも認められてもちろんいいでしょうし、ご自分の中でも、自分の人生に対して自信を持ってもいいはずだと思います。

もちろん三番目の方も、「まだまだ女性が仕事をしていくのは大変だけど、本当に一生懸命やって、しかも、かわいい子供も出来て、本当によかった。」と大満足してもいいはずですよ。周りの人たちは、「よくやっているわ。」と思っていると思うのです。

でも、本人はこれでも足りない、まだ何かに成らなければいけないという風に思ってしまった。おそらく同じ立場の男性であれば、もちろん男性でもいろいろな方がいますけれど、「俺はまだまだ欠けている。」とか、「もっと何かに成らなければ。」という、もちろん会社で出世しなければとか、収入を上げたいとか、それはあるかもしれませんが、別に、そこまで、この女性たちのように自分を否定し、自分を惨めに感じ、自分は何か申し訳ない、というような罪悪感や欠落感をもたずに、「いやー、忙しいな、毎日…。」という風に思っているのではないかなと思うのですが、女性たちは、それがなかなか出来ていない。つまり、どんな生き方をしても、まだ足りない、自負心を持ってない、あるいは自己肯定感を持ちづらい。そう思いながらも、とにかく、今何か目の前の事に必死で頑張っているという、そういう女性たちが、まだまだ少なくないのではないかなと思います。そして更に大きな問題は、特に仕事を持っていらっしゃる、先ほどの一番目の方ですね。キャリアを築き、女性として、一生懸命仕事の中で頑張っているという女性が、特に自負心を持ちづらい。そういう抵抗が、女性同士の間でも、自分に対してプライドを持ちづらいという雰囲気、まだまだ世の中にあるのかなと思います。

皆さんも時々ごらんになる「AERA」という雑誌に出ているケースで、もう十年ぐらい前に出ているケースかもしれませんが、とても印象的だったので、未だに私も忘れられないのですが、あるキャリア女性と言うか、仕事をしている女性が、体験談として書いていました。

その方が、ボーイフレンドはいた…、ボーイフレンドは、いわゆるフリーターというアルバイトしているような男性だった。でも女性としては、その自分の恋人は、とても人間的には魅力的だし、自分はしっかり仕事をしているから、収入の面では、多少問題はあったのですが、「まあいいわ。」と思って、たとえば一緒にご飯を食べに行ったら、女性が支払いをすとか、誕生日には、男性が欲しいと言っているような少し高価なものをプレゼントしてあげると言う事をしていた。でも、女性は、別にその事に対して、「男がプレゼントをしてくれるべきだ。」とか、「いつも男が支払いをすべきだ。」とか全く思っていなかった。「今支払能力のあるほうが、お金をだせばいいや。」と思って、もちろん男性の方もその事に対して、別に引け目を感じているという風にも見えなかった。ところが、ある時、その男性に、「もう別れたい。君とはもう交際をやめたい。」と言われた。そして自分の元を去っていった。「どうして。」と聞いたら、「別に好きな女の子が出来た。」と正直に言われた。その人は、正直に他の女性が好きになったと言われたことは、もちろんそれはショックだった、と言うのですね。当たり前ですね。ところが、その女性は、ずいぶん冷静な人なのですね。自分の恋人が他に好きな女の子が出来て去っていった…まあそういうこともあるかもしれない…、他に好きな人が出来るのはしょうがない…、人間、いくら恋人がいたって、他に好きな人が出来るかと思える…、しかし、ひとつ許せない事がある。それは何かというと、その男性が去り際に言った、

「今、僕が好きになった女の子はね、体が弱くてあんまり仕事が出来ないって言うんだよね。だから僕が何とか支えてやらなきゃいけないんだ。でも君は、僕なんかいなくても独りで生きていけるよね。仕事もあるし、お金も経済力もあるから、

僕なんかいなくても大丈夫だよ。でも今度の彼女は違うんだよ。」って言って去っていった。だから、その男性が彼女を振った事よりも、「仕事が出来、仕事をしていて経済力のある女は、そうじゃない女よりも格下なのだ。」と言われた気がした。「女としては、レベルは君のほうが低い。女としてのレベルは、働けないとか、男性に頼らないと生きていけないとか、そういう人のほうが、実は女性としてはレベルが高いんだ。君は女性としては格が下なんだ。」と言われた気がした。それが許せない。これちょっと複雑な事ですけどね。

「失恋した事よりも、それが楔のように自分の中に打ち込まれてしまった。それからずっと仕事をして、上司からも評価されたり、あるいはポジションが上がったりする度に、逆に女性としては格が下がっているのではないかと…、また、これで女としてレベルが下がったという風にどうしても感じてしまうようになってしまった…、呪文のように、その彼氏が去る時に言った、その一言が自分の中からもう消え去らない…、これは非常に腹が立つというか悔しい…、今思うとその男の人は大した男じゃなかったかもしれない…、だから、別に、その人が去った事は、そんなに悲しくないけれど、そういうことを、自分に言い残して去っていったという事が、非常に悔しい。」

このような体験談を書いている人がいて、とってもリアルな話だなと思いました。このように、むしろキャリアを築いているとか、女性が仕事の中でポジションが上がるとか収入が上がるとかいうことが、むしろ女性、女としての価値と引き換えにしているみたいな観念が、社会の中に、あるいは当の女性たちの中にもあるのではないかと。

私は立教の教員をやっており、自分の学生の事をあんまり微にいり細にいりは話せないのですが、学生たちが、来週、卒論を提出する時期で、今、ちょうど追い込みで、いろいろ添削しています。先週も、ちょっと学生と議論になったことがありました。それは、女子の学生が、早くテーマ出してと言っても、なかなか出してくれなくて、つい「目次が出来ました。」と言って見せにきたの

ですが、「女子力について考える」というテーマだったのです。「そういうテーマもあるよね。」と言って見せてもらったところ、彼女が考える「女子力」は、いわゆる、「女として男性からどう評価されるか」を検討するテーマなのですね。「何、この女子力って。」と言うと、「本や雑誌に、こういうタイトルありますよ。」って、「いや、それは分かっているけど、それは仕事が出来るとか、社会に貢献するとか、そういう事も入っているの。」と言うと、「それはさておき・・・」みたいな事を言うのです。その学生は、「やっぱり、それは男子からモテる、モテたくない女はいませんよ。」と確信を持って言うのです。「じゃあ、モテる女ってなんなの。」とこちらも、ついムキになっていると、それは、やはり、男が好きな女っていうのは、髪をくるくる巻いているとかね、ふわふわした服を着ているとかステロタイプ的なことを言うものですから、それは違うと思うんですけど・・・。

でも、彼女が言うには「先生見てください、この雑誌。」と言って見せられた雑誌には、いわゆる女子力アップの秘訣みたいな事が、たくさん書いてあるのですが、ボランティア活動をするとかそういうのではないですね。そこには、ファッションとかメイクで、こう化けるみたいな話ばかりなのです。これが、女子力だって、彼女も言い切るわけですね。「じゃ、本当に、過剰に媚びたりするとか、みんな、こういう格好したいの。」と聞くと、「したくない。」と言うのです。その彼女も、「もっとあっさりしたい・・・、だから、別に心までそういう風になれっていう事じゃない・・・。」と言うのです。これは演出として、男性に評価されるために、いわゆるコスプレみたいなものなのですね。その技術をどう磨くか・・・そこが、昔のただ女らしくなるっていうのとは違う・・・と彼女は言うのです。「それはいい事なの。」と言うと、「いい事だ。それは、もう女子同士では、それはみんな分かっている事だ。」と答えるのです。「あの人は、本当は、女性同士ならば、ざっくばらんで、ニュートラルな人だけでも、男の人の前にいくとなると、急にすごく、かいがいしくしたり、忌々しい事をしたりする・・・それは二面性って事じゃ

ないの。」と言うと、「それを出来る人であればあるほど、女子力が高いという事で、女性同士でも、評価が高い。」と彼女は言うのです。もうそれ以上、「論拠は」と言っても切りがないので、その辺はまたいろいろ議論したのですが。

彼女が言うには、そういうことでもしないと、やはり評価されない世の中で、男性のいる社会では、評価されなくて損だという風に言う。ただ、その背景には、別にその何かの信念があるわけではなくて、そういうものを売りたいとか、女子力アップの商品、洋服だとか、化粧品だとか、美容に関係した技術みたいなものを売りたいという、商業主義的な思惑があるわけです。彼女は、そういうところには気付いていなくて、「女子が、自分で選んでいる。」みたいな事を言っているところに、一番問題があって、いろいろその辺をお話していたんですけど・・・。

ただ、これがどうも日本の今の女子の大学生とかそういう人の話だけではなくて、今年ですね、ベギー・オレンスタインさんというニューヨークタイムズに書いているジャーナリストの方が書いた「プリンセス願望は危険がいっぱい」という本が、日本でつい二、三ヶ月前に翻訳されて、このタイトルは、ソフトですけど、中身は、非常にハードな本なのですが、このジャーナリストの方が、アメリカでも、と言ったら変な言い方ですけど、まず、アメリカの社会の中で、お姫様ごっこ的なプリンセス願望を刺激するような、いろいろな仕掛けがあるということを言っているのです。彼女が結論として主張しているのは、いろいろな調査では、そのお姫様ごっこ的なことをして、そのプリンセスに近づこうとすればするほど、逆に、むしろ女性の方が、将来に対してあまり高い望みを持ってなくなっている・・・、あるいは、中にはだんだん抑鬱傾向が出てくる・・・、いわゆる男の人たちを押しのかたりしないように・・・あるいは王子様が現れるのを待っている・・・、だから、女性らしいでたちをしながら、待ちなさいといったメッセージが刷り込まれて、心理学的に、そういった古典的なプリンセスに憧れるような傾向をもった女性たちの性格傾向などを分析すると、抑鬱的

だったりとか、あるいは非常に高い望みを持っていなかったりという傾向が目立つといったような調査結果を紹介していました。

そして彼女が言うには、特にアメリカでは、世間に流布しているメディアに触れれば触れるほど、知らないうちに、女性たちが、かわいいセクシーさを重視するような価値観になっていってしまう…、そのかわいらしいセクシーさというのを重視する価値観になればなるほど、結局、性格的には、先ほど言ったような、抑鬱抵抗が強いとか、あるいは自分の将来に対して高い望みを持っていないといったような性格傾向が、知らないうちに形成されてしまう…、しかも、これらの背景にすべてあるのは、今言ったような商業主義、市場主義、別に政治的に保守思想を女性の伝統回帰を促そうとかといったものではなく、ひたすら、女性らしい、かわいらしいセクシーさというものを強調した商品を売ろうとする…、その色々なビジネスが、その人たちの流れによって出来ている事なのだという、それが彼女のひとつの結論でした。だから、決して、誰かのもっと大きな社会的な思惑が働いて、女性を、そういう風な型どおりにはめようとしているということではなくて、そういったプリンセス的な色々なものを売ろうとする人たちのビジネスの世界の流れによって、できている傾向なのだ。その事を彼女は、「プリンセス願望は危険がいっぱい」という本で主張していましたが、その背景にあるのは何なのかというのは別として、今言ったような商業主義というものが、ひとつあるというのは確かにそうかなと思います。

でも、もちろんそういった商業主義が存在すれば、もっと消費してもらわないといけないわけですから、切りがないわけですね。ただちょっとプリンセス願望を刺激しても、一通り回ったらおしまいとなれば、そこで終わってしまうので、もっとプリンセスになるには、次はドレスだけじゃなく、じゃあ、このティアラをどうぞ…、ティアラを買った人には、次はこの魔法の杖をどうぞ…、それを買った人には今度はじゃあその人た

ちが乗る馬車みたいなものをどうぞ…といった具合に、どんどんどんどん次を用意していくわけですから、限りがないですね。知らない間に、私たちも、そこに乗ってしまって、最初に私が紹介した、四十二歳の人たちなどを見ても分かるように、どこまで到達すれば、自分でも自己充足し、自分を肯定する事が出来るのか…、あるいは世間からも、「あなたはよくやった、もう十分だ」と言ってもらえるのか…というのがわからなくなっちゃうわけです。わからないけど、やらずにはいられないのですね。おそろくわからなくなって、邁進している女性たちは、もうかなりエネルギーが磨り減っているの、いったん休まないとい…。

診察室にいますと、私は医者としては、彼女たちに、「ちょっとあなた、やりすぎているから、いったんすべて一回中断してゆっくりしなきゃいけない。」と言うのですが、その人たちは、そんな事したら、ますます自分の欠落感が強くなってしまいます。それよりは、とりあえず、目の前の事を一生懸命やっている…、あるいは、そうか、私に足りないのは、何かわからないけど、テレビとかを見ていると、資格を取れますみたいな講座が出て、これだと思っちゃったり…、あるいは、素敵な趣味を持ちましょう…となると、そうか、ガーデニングをやれば、この満たされなさは治るのか…といってガーデニングを始めちゃったりですね。もう、次々にいろんなことをやって、自分の生活を、心の中の空しさを埋めようとするわけですね。でも、もうそれは、やればやるほど、エネルギーが、かなり危険水域ぐらまで磨り減っている上で、更にやるので、ますます今度は、焦りの感情とか不安感が強くなるだけなのです…本当はね。でも、やらずにはいられない。世間的にも、その人たちにさっき言った商業主義もあって、「もっとやりなさい、もっとこれがありますよ。そうですね、あなたは満たされていませんよね。それを満たすために、今度は、アンチエイジング美容ですよ。」というように、美魔女になればいいみたいに、次々に、仕組みを用意していくわけですね。何らかのお金がかかるような仕組みを用意しているのですね。知らない間に、世間とか社



会で、「よくやっている女性」というものに対するハードルも、非常に上がってしまっているわけです。

たとえばですけども、これも正しい例か、適切な例かどうか分かりませんが、私が子供の頃、小学校に女性、その頃は、女性で仕事をしている方という、一番典型的なのは、学校の先生ですね。学校には、女性の方が何人かいました。シングル、今で言う結婚せずに、そのまま四十、五十になった先生たちもいました。その中には、本当にいつもおしゃれもせずに、メイクもせずに、いつも同じジャージ、そういう先生も私の学校にいました。今思うと、いつもジャージというのは、やりすぎだと思いますが……。でも、その先生は、生徒たちからも保護者からも、非常に尊敬されていましたね。いわゆる、あの人は、教育一筋ということですね。もう、おしゃれもやめ、女性としての生き方というの、もう追求するでもなく、子供たちの教育のためにすべてをささげている。

この例も適切かどうかはわからないのですが、たとえば、もう引退している政治家の土井たか子さんという方が、憲法と結婚した女とか言われていますね。ある意味、あそこまで全うして、憲法、護憲という事に、添い遂げるという姿勢は、やはり、非常に尊敬されていると思うのです。今、それこそ選挙ですけど、女性候補者の方が、たくさん出でらっしゃいますが、皆さんどうかといいますと、今まで本当にそういう方々は、いわゆるファッションナブルだったり……。センスがよかったり……。あるいは、それこそ、家庭も持っていますという事を強調されたり……。もちろん、見た目もとても感じも良かったり……。あまり堅苦しい感じではなく、実は自分は、こういうソフトな趣味もあります……。とか本当に何でも持っていられる方ですよ。それぐらいしないと、私たちは、「あの人はどうなのだろうね……。なんか難しい話ばかりして堅苦しくて、いわゆるかっこつけている……。女としての魅力に欠けているよね。」って。仕事も出来、おしゃれもし、スタイルの維持にも気をつけて、そして子育てもして、更には意外な趣味も持っているぐらい

じゃないと私たちが、もう認めない。そうでないともう、その人を標準という風に思えなくなっている。でも、これは、本当に女性たちにとっては、もう本当にハードルがどんどん上がっている、認めてもらえないという、私たちが、自分の中で作る、まあよくやっている女性というものに対する、要求水準というの、本当に、どんどん上がってしまっている。当の女性が、「そんなこともうやめて……。いい加減にしてよ、出来るわけ無いじゃないそんな事……。そんな仕事もして、ファッションもセンスも磨いて、美容も気をつけて、髪もきちんとして、最新の流行も取り入れるなんて、そんなこと出来るわけ無いじゃない……。馬鹿なこと言わないで。」と言えればいいのですが、女性たちも真面目だから、そう要求されたら、自分もそれを実現しなきゃいけないのではないかと……。それは、自分はもう仕事が忙しいから、ちょっとおしゃれは出来ません……。とか、あるいは、もう自分は今、家事が、家庭のことがあるから、こっちは出来ません……。とか、そういう風に言えない。「あ、そうか。やらなければいけないんだ。」と、自分たちで、どんどん課題を増やしているという状況もあるのではないかなと思います。

そういう意味では今、女性として生きていく事というのは、自由になっているとか、生き易いとかではなくて、やらなければいけないことが、非常に増え、それだけの事をやっても、なかなか自分の中でも、肯定できない。まだ足りないのではないかという風に、欠落間を持ったまま、あるいは、自分と違う立場の人に対して劣等感とか、引け目や罪悪感をもってしまう、私なりにやっているのだと、なかなか思えない。だけど、どこに正解があるのかも分からないという中で、女性たちが、今、生きなければいけない。なかなか私も大学の教員をやっている、特に女子の生徒たちは、自分はどんな風な卒業後進路を選択していいのかという事を決めかねている。もちろん私たちの大学でも、「女性就労とワークライフバランス」という授業があり、この授業には、たくさんのゲストの方がいらっちゃって、色々な企業で、ダイバーシティとかに取り組んでいる人事の方や、ご自身

もワークライフバランスを実現されているような女性の方がいらっしゃるって、自分の人生について、いろいろお話をしていただいています。私は、いつも立ち会うという立場で授業にいらるのですが、見ていて、自分がこの授業にかかわりながらも、難しいなと思う事もあります。それはどういう事かといいますと、授業の後に、毎回学生たちにレポートを書いてもらうのですが、多くの学生は、「すごく励まされた。」とか、たとえば、女子学生は、「私も卒業したら、もし結婚したら、仕事はここで止めないといけないかなと思ったけども、ああ、そんな事はないんだ。」とか、「皆さんいらっしゃる方は、仕事をしていて良かったとおっしゃるから、私もやってみようかなという気になってきた・・・。」とか。男子学生の場合は、「女性がそういった人生を歩めるように、自分も、もしも家庭を持ったら妻になる女性には協力したい・・・。」とか、優等生的なというか、私たちが、教員として望んだ回答を書いてくる学生も、多いのですが、中には、「私には、とてもあんな事は出来ないと改めて気付いた・・・。」とか、「本当に大変そうで、こんな事は、私には、絶対無理だと分かった・・・。」とか、むしろそういう人たちを見て、反面教師じゃないのですが、「自分は、とてもそれだけの気力や体力がなさそうだな」という風に思ってしまう、あるいは、「私は、むしろ、ああいう生活はしたくない・・・。」とか、「私は、もうちょっと、のんびり生きていきたい・・・。」とか、「私は、もう少しゆとりがあるような趣味を楽しみたい・・・。」とかですね、そんな風にして書いてくる学生もぼつぼつといたり、あるいは、個人的に学生と話す時、そういう事を言われたりするのです。もちろん、それは学生の自由なのですが、ただ本当に今の時代、女性が本当に生き生きと充実して生きていくのは、並大抵の事じゃないのだというのは伝わってしまう。実際にそうじゃない訳ですね。私が話をし、並大抵の事ではなくなってしまう訳ですね。これ自体が、本当にある意味、問題だと思うのです。そして、今言ったように、答えはひとつじゃない・・・、女性の生き方といっても、もちろん、すばらしいキャリアも、家庭という風にいろんなものを実現できていけば、それ

はすばらしいのですが、当たり前の事ですけど、人生には、いろいろな時期もあり、ライフステージごとにいろいろな働き方、生き方を変えていかなければいけない場面もあって、一本道じゃないわけですね。でも、その都度、女性たちが、自分の生き方はいけないのではないかとか、こんな事をしていては、これまでの努力が、無駄なのではないかという風に、自分のことを否定したりとか、人と比べて劣等感を感じたりしなければいけないとか、これも非常に女性を生きにくく、あるいは仕事をしにくくしているのかなと思いますね。本当にこう、ダイバーシティとかで、いろいろな人生を複線化して、単線ではない、いろいろな生き方が可能で、こっちがだめでもこっちがあるさっていう具合に、そういう事が、必要だと言われているのに、まだまだそういう社会になっていない。ちょっとでも、ルールを踏み外すともう戻れないとか。そこで、ちょっとでも自分の考えていたのと違う人生になってしまったら、それはもう失敗だとかで決まってしまうとか、そんな風になっている。これは女性だけじゃなくて、男性にとっても生き辛い雰囲気というものを、ひとつ作っているのかなとも思いますね。だから、本当は、私は、キャリア形成というのは、精神科医としては、診察室で見ていたら、本当にその時々で、調子がいいときもあれば、思ったように仕事できないときもある・・・、でもそういう時には、少し仕事を減らして、また十分に仕事出来るような時期に来たら、また仕事を一生懸命やるというように、緩急つけた暮らし方とか、そのライフステージにあわせたような仕事の仕方とかが、出来ればいいなと思うし、企業では、なかなかそんな風なとり方出来るところは少ないと思うのですが、せめて気分的には、まあ、それでもいいのだという風に思える・・・、いつも同じペースで右肩上がりに仕事の量を増やしていかなければいけない・・・とか、キャリアを上げていかなければいけない・・・と思う必要は無いと思うのです。でも、まだまだ、一度始めたらずっと、同じペースでどんどん、収入も、ポジションも上げていかなければいけないのではないかとこの考えに縛られてしまうと、逆にそれが継続、就業継続出来なくなってしまいます。

ちょっとだめだったら、もう止めよう…とか、あと一回止めてしまったら、もう戻れない…とか、そんな風に思っている女性も、少なくないように思いますね。いずれにしても、まだまだ女性にとって、どういう生き方をする事が、一番幸せなのかというのは、社会にとっても自分にとっても、まだまだ試行錯誤しているような状況なのです。こんなに、男女雇用機会均等法ができて長く、もう四半世紀以上たっているのに、まだ見つからない。それこそ、今、選挙で色んな政党が公約を出していますけども、その中でも、本当にいろいろですよ。女性がすごく生き生きと結婚や子育てをしながらでも、仕事をし続ける事が出来るようにという公約を、全面的に出しているところは小さな政党で、本当にぱっと見ると、すごく強調しているのは、今の新しい未来の党という女性の党首の方がいるところですかね。たとえば、別にその党がいいとか悪いとかではないのですが、公約を見ると、自民党などは、女性の仕事という事には、公約の中で、あまり触れていないですね。維新の会を見ると、一言ワークライフバランスと書いてありますが、それがどうしたということを書いてなくて。今の維新の八策から出ている日本維新の会の公約をいろいろ見たのですが、ワークライフバランスという一言の単語が入っていました。それが実現するのか、止めるのか何も書いてなくて、どうなるのかなと思ったのですが、残念ながら今回の選挙でも、あまり女性という事が争点に出ていない。まあ世の中、きっと皆さんそれぞれじゃない…、もっと、景気とか外交とか、安全保障とか、いち早く通す改革があるみたいな雰囲気になっているのかもしれませんが。ただ、日本の、これからの、それこそ景気回復でもなんでも、女性が、きちんと社会の中で仕事をするということ、少子高齢化で、労働人口が減っている中で、女性の就業を受け入れることは、実は、景気回復や経済の建て直しの上でも、大きな問題だと思うのです。残念ながら、本当に、今回選挙で、女性というのが問題にされていないというのは、大変な事があると、女性の

事は、二の次三の次なのかなとつい思ってしまったかもしれませんが、そういう状況で、今度は、どの政党が本当に政権をとるのかよく分かりませんが、そこで、女性のキャリアとか女性の人生という問題はどうかというの、若干、私としては、心配でもありますね。というより、またちょっと変わってしまうかもしれませんね、いろんな意味で。

また政権が変わると、考えがちょっと変わったりしてしまうかもしれません。まだまだ女性は自由だよねとか、女性も強いよねと表面的には言われていますが、実は状況はあまり変わっていないとか、あるいは診察室にいと、ますます混迷しているとか、生き辛くなっている、あるいは、どこに正解があるのか分からないままみんな必死に磨り減っているエネルギーの中で、更にまた自分に夢中という女性ばかりが目についてしまって、これは、本当に私も、深刻な事だなという思いを強めるばかりですね。

こういう女性の問題は、もう答えが出ている…、女性も自由に仕事を選ぶようになって、本人にさえやる気があれば、女性も何でも出来るのだから、もうこの問題をいまさら話し合わなくても答えは出ている…と思える方もいるかも知れませんが、ぜひ皆様たちにも、どうか私の診察室の経験という、非常に狭いところから出た話ではありますが、今日のような状況に置かれている人がまだまだ少ないということを頭の隅に置いていただいて、いろいろと、これからのご研究とか、あるいは実務の上でもすこし配慮していただければと思っています。

もう時間になってしまって、まとめ事をいえないまま時間が終わってしまいましたので、この私のざくばらんな雑多な話をうまくまとめてコメントしていただけるのではないかと期待しまして上条先生のコメントにお任せしたいと思っています。まとまりの無い脈絡の無い話で、失礼いたしました。ご静聴ありがとうございました。

